

SDGsの視点からの学習活動研究部会 研究活動記録

中間報告書 研究編

中学校

一般財団法人栃木県連合教育会

令和6年9月

3 校種毎の調査結果に基づいた考察【中学校】

1 中学校の現状とSDGs

現中学生の親世代が子ども時代を送っていた1980年代、SDGsのルーツといえる「持続可能な開発（Sustainable Development）」が国際会議で打ち出された。東西冷戦の終結とともに、世界の長期的な安定と平和のためには、地球環境問題に共に取り組むことが不可欠であるとの共通認識が世界の指導者層に広まっていくこととなった。しかしながら、顕著な改善が見られない現代において、現中学生は、生まれた時から「地球温暖化」という言葉を自然と耳にして育っている。彼らの幼少期に定められたSDGsは、レジ袋の有料化やジェンダーフリーの制服の導入、学校給食で提供される牛乳のストローレスなどさまざまな形で子どもたちの身近な生活に溶け込んでいる。現行の学習指導要領には、「持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる」という形で明記され、子どもたちが使用している教科書にも、学習している単元についてSDGsの視点で書かれたコラムなどが多く載っている。9か年の義務教育の最後には、社会科では「私たちと国際社会の諸課題」について、「効率と公正」などこれまで学んできた見方・考え方を働かせ、生徒一人一人が持続可能な視点に基づきどのように解決すべきかをレポートにまとめたり、理科では科学技術を利用して生じた問題を、科学技術を用いてどのように解決すべきか、一人一人が調べまとめたりする指導計画が多く学校の設定されている。

また、生徒会活動や学校行事等において、ペットボトルキャップや衣類、文具類を集め、諸機関に寄付するという活動などが、生徒の自主的な意見に基づいて行われ、特別活動でも各校において生徒の自発的意思と実態に応じて展開されている。

このように、栃木県で育つ子ども一人ひとりに、予測困難な時代をたくましく生き抜く力を身につけさせ、よりよい社会、未来の形成に何らかの形で関われる人となるように、各校、各教員によって日々実践が続けられている。この報告書では、SDGsに関する学習や取り組みがどの程度浸透しているか、また、その取り組みを推進する上での課題が何かを明らかにするものである。

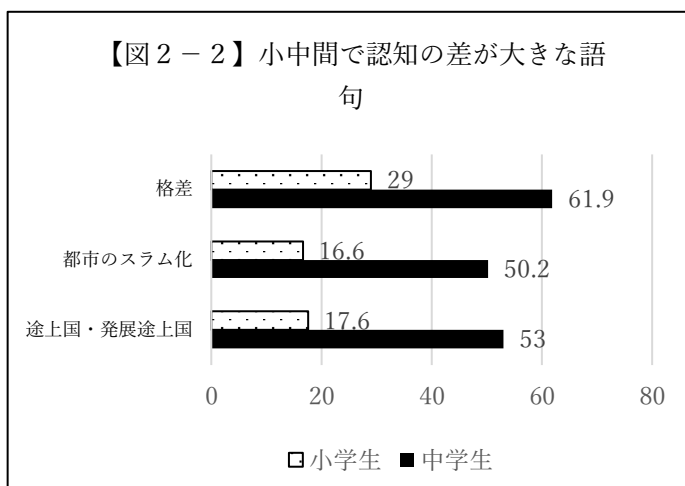
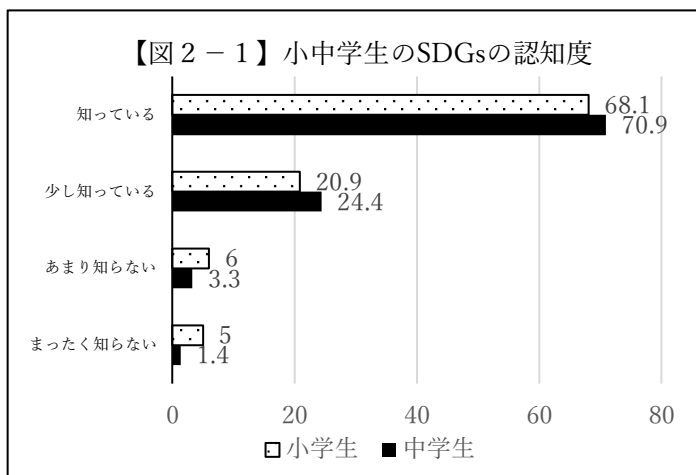
2 アンケートの結果から

(1) 生徒について

生徒の実態をより明らかにするために、設問によって小学生のデータと比較していく。

まず、生徒自身の認識度を把握するために、設問2「SDGsを知っていますか」を比較分析し、【図2-1】を示す。小学生6年生よりも6.3ポイント高い、95.3%の生徒が「SDGsについて知っている（少し知っている）」と肯定的に答えている。アンケートの対象学年が中学2年生であったことを考えると、1年次の社会科（地理的分野）において、持続可能な社会づくりについて考える学習をしていることから、本来100%になってもよいはずである。原因は、他人に教えることができるほどの理解ではないと感じた生徒が少数いたと推測される。

設問12は、SDGsに関するキーワードの認識度について尋ねたものである。同じ項目について、小学生の回答と数値に特に大きな差があったものを【図2-2】に示す。22語のうち、「格差」「都市のスラム化」「途上国・発展途上国」の認識度が、2～3倍に高まっていた。これは、中学1年次の地理で学習する内容である。このことから、授業で扱っ



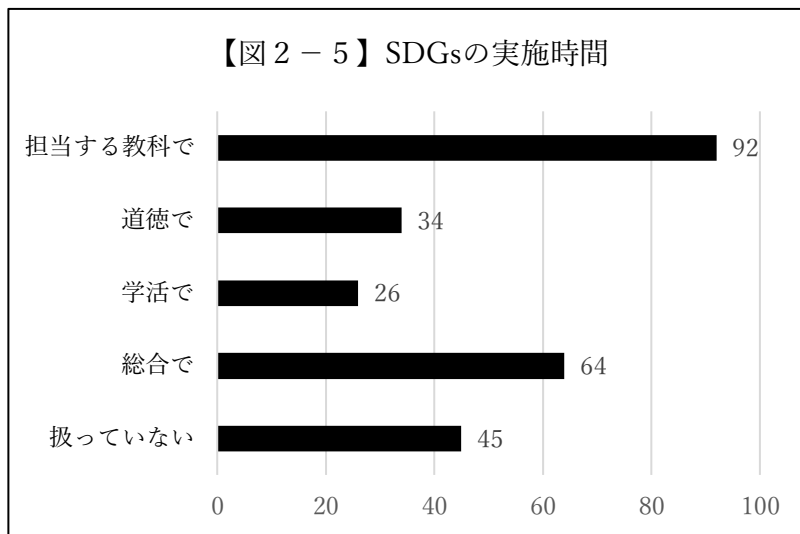
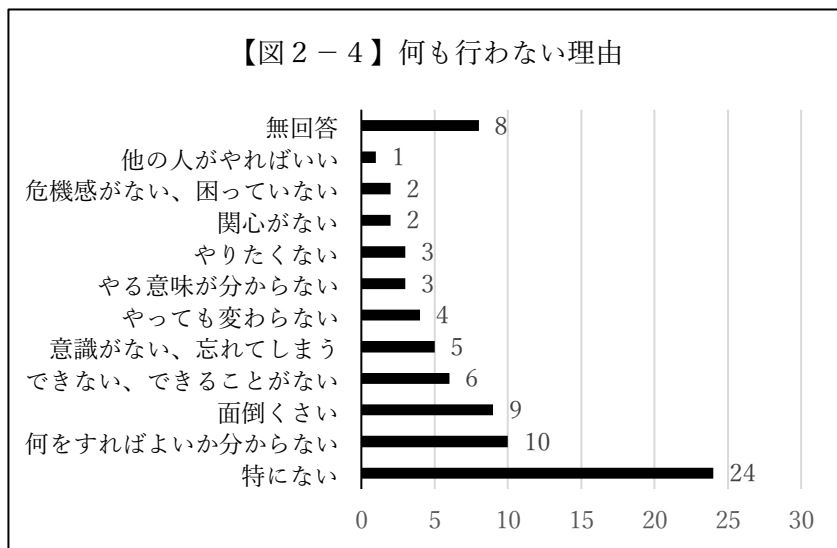
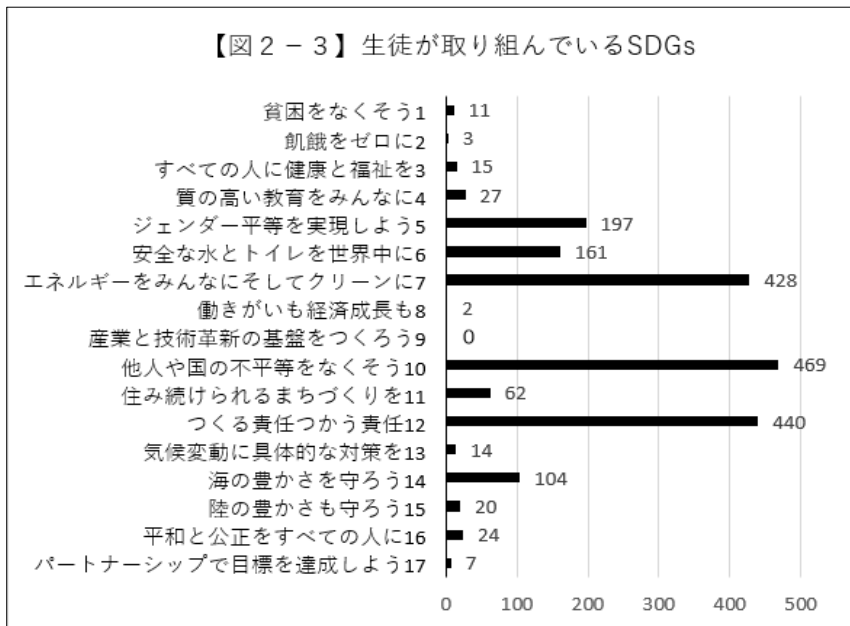
3 校種毎の調査結果に基づいた考察【中学校】

た内容は生徒の中にしっかりと残るということが改めて明らかとなった。

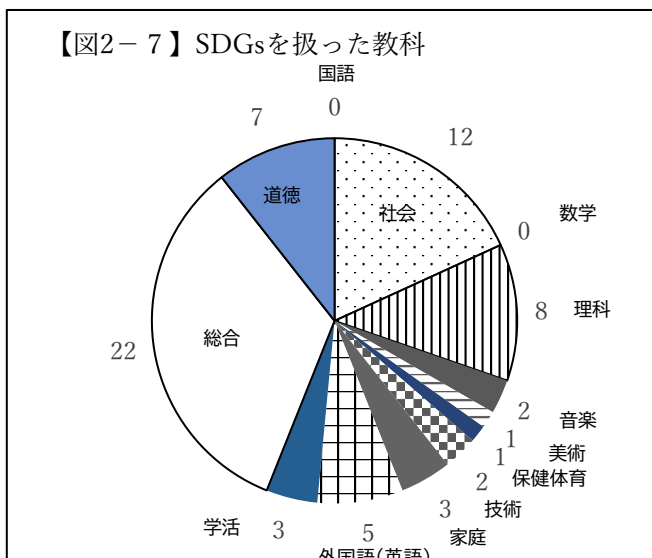
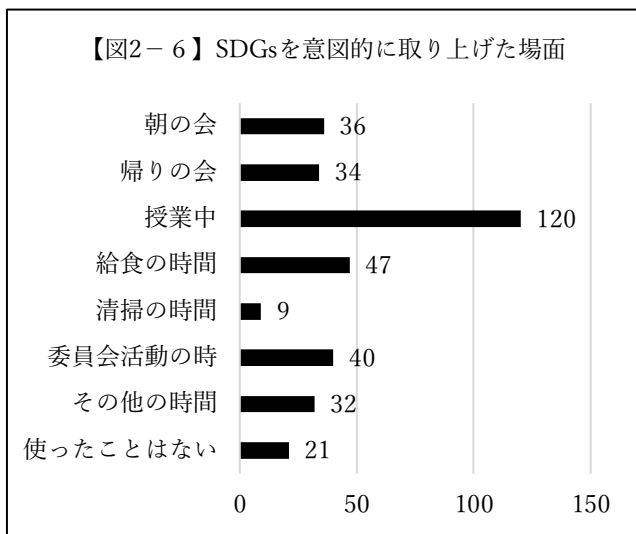
また、設問5「17の目標につながるどのようなことに取り組んでいるか」の自由記述について、作成した分類表が【図2-3】である。目標7「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」については、取り組んでいると回答した生徒428人中、省エネ・節電と回答した生徒が262人、リサイクルと回答した生徒が140人だった。目標10「他人の国の不平等をなくそう」については、誰にでも差別しないで接する440人だった。目標12「つくる責任つかう責任」については、最後まで使うと306人が回答した。設問8「目標達成のためにあなたが日ごろ取り組んでいることは何か」では、73%の生徒が水筒を持ち歩いていると答えた。これらのことから、多くの生徒が日常生活の中で意識して無理なく取り組んでいることが伺えた。一方で、ごく少数であるが、「何も行っていない」と回答する生徒が92人いた。背景には、図2-4に示したとおり、「できない、できないことがない」や「何をすればよいか分からない」などのように、当事者意識の欠如や無関心などが挙げられる（【図2-4】）。しかし、本当に一切行っていないのか、目標と実践の関連性に気づいていないのかは分からない。

(2) 教員について

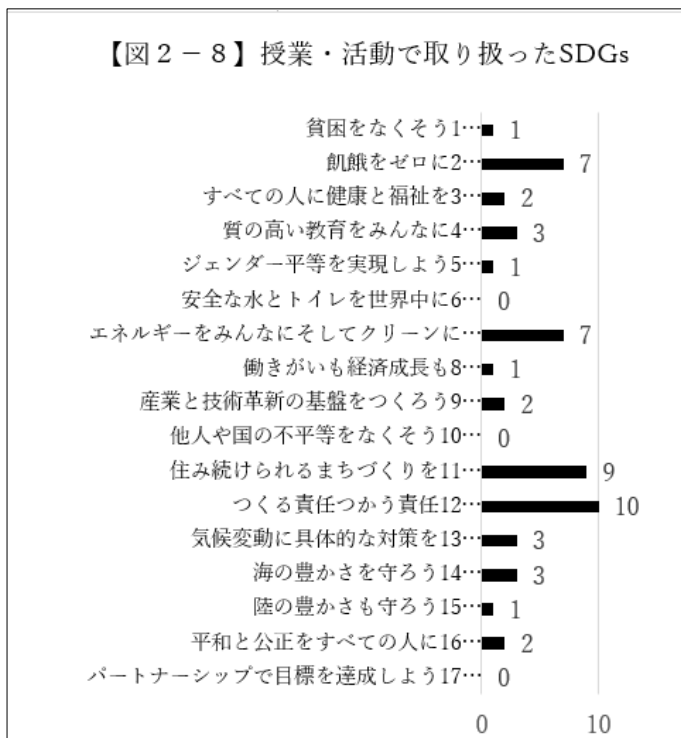
設問8「先生は授業で扱っていますか」の結果は、【図2-5】に示すとおりである。また、設問10「先生が学校で生徒たちに「SDGs」という語句を意図的に使ったのはいつですか」の結果を、【図2-6】に示す。設問11の「どのような教科で実践されているか」の自由記述回答を整理したものが【図2-7】である。



3 校種毎の調査結果に基づいた考察【中学校】



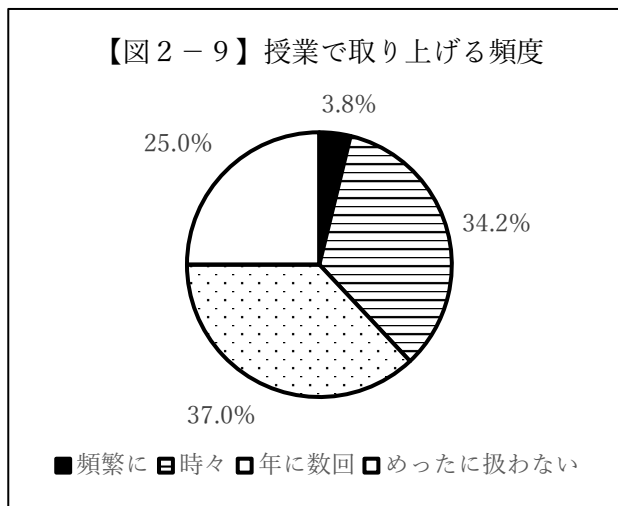
県内の全教員からの回答ではないことを考慮しつつも、図2-7からは、総合や社会、理科などが多いことから直接的に扱いやすい教科があることがわかる。さらに、設問12の自由記述を分類した【図2-8】からは、17の目標のどれに関する実践が多いかにも、特色が表れた。「授業で扱った事柄は生徒に知識として残る」と前述したところだが、興味深いのは、【図2-3】と【図2-8】を比較すると、教員が授業で実践した項目が、生徒の行動に直結するとは限らないということである。例えば、目標2「飢餓をゼロに」については、7名の教員が授業で扱ったと回答しており、3番目の多さだが、取り組んでいる生徒の人数は3人と下から3番目の低さである。反対に、目標10「他人や国の不平等をなくそう」は、授業で取り扱われていないが、469人の生徒が取り組んでいると回答している。設問9「先生がSDGsを授業で扱う頻度はどれくらいですか」でも、「時々」や「年に数回」という回答が過半数を占めていることが【図2-9】から分かる。知識として知っていても、それらを生徒の日常生活の事象とどのように関連付けるかが課題である。さらに、設問13「学校でSDGsを指導するためにはどんなことが必要か」の自由記述を整理すると、以下のように分類された。



- ・教員の深い理解 41 (29.1%)
 - ・自校以外の取り組みが知りたい 26 (18.4%)
 - ・リサイクルなど、小さなことを実践すること 21 (14.9%)
- 上記の3つが上位を占めた。しかしながら、設問15に寄せられた意見の6割が「教材研究を

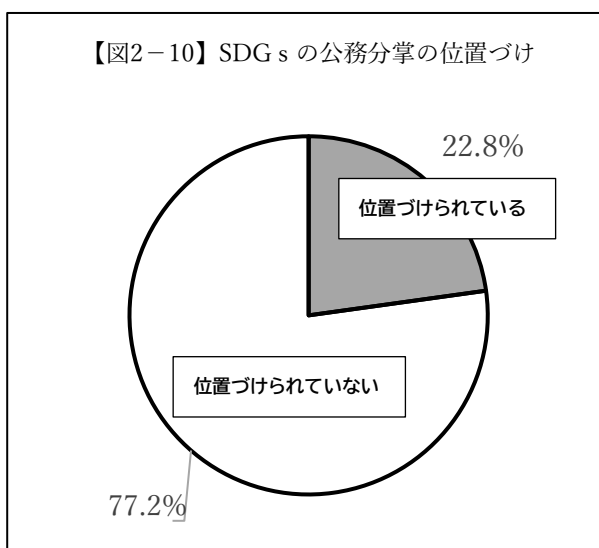
3 校種毎の調査結果に基づいた考察【中学校】

したいが、時間的にも精神的にも余裕がない」という多忙感と使命感の間に板挟みになっている教員の声であった。昨今、さまざまな面から働き方改革が叫ばれているが、ESD（持続可能な開発のための教育）推進の面でも、どのように教育活動の中に組み込むかを検討する必要があることが改めて明らかになった。



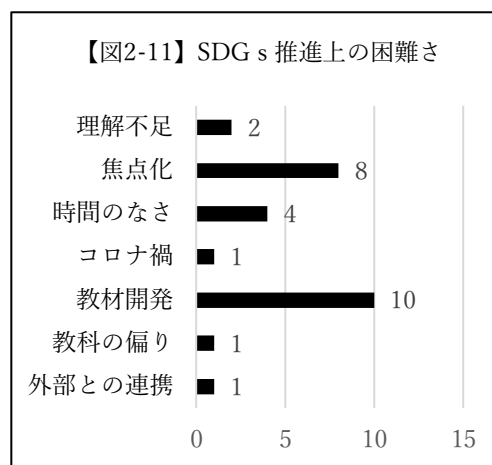
(3) 学校について

【図2-10】からも分かるように、約4校中1校の割合で、SDGsが校務分掌に位置づけられているとの回答があった。位置づけられている分掌名や扱う行事等を見ると、環境教育や人権教育、総合的な学習の時間の中という回答が多かった。中には、「SDGsプロジェクトチーム」や「SDGs推進担当」という学校もあった。また、設問6「SDGsと学校行事を関連させた取り組みを行っているか」については、半数の学校で関連させていると回答した。一方で、設問8「SDGsに関する内容を扱う場合、学校として困難な点は何か」の自由記述は【図2-11】のように整理される。ここで確認される「学校として困難な点」は、教員としての課題と同じであった。



3 アンケート調査から分かったこと

- 教科書に載っている語句や授業で取り扱った内容は、生徒に定着している。逆に、教員の認知度が低い用語は、連動して取り扱いが低い傾向にあった。学校教育で扱うことの大切さが伺えた。
- 取り組みやすい教科とそうでない教科、学校教育として扱いやすい目標とそうでない目標がある。
- 教員としても学校としてもSDGsが重要であることや、取り扱うことで十分な教育的効果があることを十分理解しているが、教材開発等に費やす時間を生み出すことが難しいと現場は感じている。



3 校種毎の調査結果に基づいた考察【中学校】

4 SDGs の視点からの学習活動を充実させるために

(1) 本研究が目指す生徒像

生徒、教員、学校のアンケートの分析から、私たちはSDGsに関する学習をさまざまな教育活動を通して積み重ねてきた生徒の姿として、「現在および将来の自分と他者のために、根拠をもってよりよい行動を主体的に続けていける生徒」としたい。これは、学校の設問9「SDGsに関する内容を扱って、学校としてよかった点」についての自由記述の中に、学習したことで生徒がグローバルな視野で物事を考えられるようになった、身近な取り組みを通して保護者や地域と連携し意欲的に活動できるようになった、など「持続可能な社会の創り手」に合致していると考えからである。

(2) 推進するための視点

- ・各教科の授業で意図的に取り上げること
- ・新たな活動を最初から作り上げるのではなく、各校ですでに取り組んでいる活動は17の目標のどれと関連付けられるか洗い出すこと
- ・学校全体で全職員が共通理解をもって取り組むこと
- ・先生方の多忙感を軽減するために、いくつかの事例を提示すること